6. 今後の展開

●本書では、幼児森林体験のためのフィールドづくりと活動を始めるにあたっての基本的な事項についてご紹介しておりますが、これはあくまでも活動のスタートまでの準備に過ぎません。

●整備したフィールドを利用し、幼児森林体験活動を実践していくなかで、いろいろと考えていかなければならない課題があると思います。

●そこで、この章では活動実践を進めていく中で考えられる課題を例示するとともに、今後あいち海上の森センターで進めていく取り組みをご紹介します。

◆指導者養成

フィールドが整備され、安全対策や幼児森林体験活動にあたっての基本的な心構えさえ知っていれば、だれでも活動を実施することはできます。

しかし、森林を楽しむための適切な助言や、森林や自然についての知識を教えることができれば、より効果的な森林体験ができると考えられます。

そのためには、幼児森林体験を進める指導者の育成が今後の課題になってくるでしょう。

【あいち海上の森センターでは】

あいち海上の森センターでは、森林や里山に関する活動の指導者を目指す方向けの講座として、「ムーアカデミーセミナー（指導者養成講座）」を実施しています。

平成 21 年度は、この講座の内容を「幼児森林体験」を推進する指導者に必要なスキルを学べるものとして全 8 回の講座を実施し、指導者育成に取り組みたいと考えています。

◆フィールド整備方法の確立

森林には、形態や植生など様々なタイプがあり、場所毎に特性が異なります。

したがって、幼児森林体験フィールドの整備方法についても、場所毎に整備方法は異なりますので、いろいろなパターンの整備方法を研究していく必要があるでしょう。

このため、様々な整備事例をデータとして蓄積し、今後幼児森林体験フィールドを整備したいという人たちに情報提供していくことが必要だと思います。

【あいち海上の森センターでは】

海上の森で今回整備したフィールドの周囲には、まだほとんど手が付けられていない箇所があります。この部分については、今後利用者とともに整備を進めていきたいと考えていますが、まずは上記の講座のなかで、指導者を目指す方たちと一緒にワークショップにより整備方法を検討し、幼児とその保護者、地域のボランティアの方たちも参加できる形で実際に整備を行います。その整備例も今後情報として提供していきたいと考えています。

◆幼児向け体験学習プログラム例の蓄積

幼児森林体験は、基本的に幼児が森林で自ら何かを感じてもらうことが目的になっています。本書でもいろいろとその事例を示しましたが、森林は季節毎でその様子が次々と変わっていきますので、フィールドに訪れる度に違う体験ができます。

これから幼児森林体験活動を実践する人たちにとっては、森林で幼児にどのようなことを感じてほしいかあらかじめ把握しておきたいというニーズは高いでしょう。

このため、季節を通じて幼児が何を感じたのかというデータ（次ページのアンケート用紙参照）を蓄積し、幼児森林体験で学べることを整理していくことが必要になってくると思われます。

【あいち海上の森センターでは】

今回整備したフィールドを幼稚園・保育園や「森のようちえん」活動を実践している人たちなどに利用してもらい、利用者へのアンケート調査などを実施し、四季を通じた利用例をホームページなどで広く発信していきたいと考えています。

◆幼児森林体験ネットワークづくり

幼児森林体験活動を、様々な形で実践している人たちがいます。例えば「森のようちえん」活動を実践している人たちのネットワークは全国的なものとなってきていますが、まだ一般の人たちまで浸透しているとは言えません。

幼児森林体験を普及していくためには、幼児教育、環境教育、森林所有者など関係者によるネットワークの構築が必要でしょう。

【あいち海上の森センターでは】

「森のようちえん」活動に取り組む関係者により、「森のようちえん全国フォーラム」というイベントが開催されています。

平成２１年度は、愛知県にて開催される予定となっていますので、その機会を通じて全国的な組織とのネットワークづくりにも取り組んでいきます。

アンケート用紙の例示

たのしい森(もり)あそび

たのしかったことや、みつけたものをかきましょう

参考

〔1〕海外の先進的な取り組み「森の幼稚園」

幼児森林体験の原点となる考え方がヨーロッパで 1950 年代半ばデンマークで始まった「森の幼稚園」です。この活動は幼児期の原体験がその後の発育に与える効果や、環境教育の手法として多方面から注目され 1990 年代には広くヨーロッパに広まりました。最近日本でも一部の保育園や幼稚園で取り組みが始まり、注目されています。

「森の幼稚園」の始まり

◎1950 年代半ばデンマークに誕生した『森の幼稚園』

◎ドイツでは 1990 年代半ばからその数が急激に増えました。

◎環境教育に熱心な両親のみならず、若者世代を取り込もうと懸命な環境行政や、発育への影響に関心を寄せる科学者からも大きな注目を集めています。

◎森の幼稚園のコンセプトの 1 つ「五感を使った自然体験」は、環境教育の分野では、「環境市民」を育てるための重要なプロセスだとされています。

◎今から約 50 年前、森の幼稚園の生みの親となったデンマークのエラ・フラタウ（Ella Flatau）という女性は、自分の子どもを毎日近くの森に連れて遊んでいました。それを見ていた近所の人たちは、当時幼稚園が不足していたこともあって、「彼女に自分たちの子どもも預けて一緒に面倒を見てもらおう」と考えました。やがて彼女の周りに住んでいた小さな子どもを持つ親たちは、自主運営によるヨーロッパで最初の『森の幼稚園』を開園しました。

◎ドイツでは、1968 年にウルスラ・スーベ（Ursula Sube）という女性が有志の親たちと協力して、ドイツで最初の森の幼稚園を開園しましたが、1990 年代の初めまで、森の幼稚園の数はごくわずかで、その存在は世間からほとんど知られていませんでした。

◎1991 年、ケースティン・イェプセン（Kerstin Jebsen）とペトラ・イェーガー（Petra Jager）という 2 人の幼稚園の先生は、ある教育専門誌でデンマークの森の幼稚園に関する記事を読み、大変感銘を受けたといいます。

◎2 人は、デンマークで研修を受けた後、1993 年、北ドイツのフレンスブルクにドイツで最初に公認の森の幼稚園を設立しました。このフレンスブルクの幼稚園が行った熱心な広報活動により、そのアイデアはドイツ中に広がり、1990 年代半ば過ぎから、ドイツ各地で森の幼稚園が開園しています。

◎現在その数はドイツ全土で 300 以上にものぼります。バイエルン州食糧・農業・林業省によると同州だけでも 30 の森の幼稚園があります（2001 年時点）。「ドイツ全土の自然と森の幼稚園」というインターネット上のリストでは、バーテンビュルテンベルク州が 72 件、またシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン州（ハンブルク市を含む）が 55 件となっています。

「森の幼稚園」の実施例

森のようちえんの園児は、普通 1 グループで 10 人から 15 人です。1 グループあたりに、教育を受けた先生が 1 人、研修生や親の有志がアシスタントとして 1 人か 2 人つきます。ここで具体的に森の幼稚園の様子を紹介します。朝 8 時 45 分、親が車で子どもを集合場所まで連れてきます。集合場所には小さな小屋があり、子どもたちは小屋の中で朝のあいさつをした後、それぞれ自分で持ってきた朝食を食べます。このような小屋は、どの森のようちえんにもあり、遊び道具などが置いてあるのです。また天気が悪い日などには、避難場所にもなります。朝食が終わると森へ出発です。

広い森の中、遊ぶ場所はその日の天気や、子どもたちの希望を優先して決めます。あるグループは、土いじりをし、あるグループは、草花を使って絵をかいたり、また元気に駆け回ったり、それぞれの子どもが、その場にあるものを使って自分の思いつくまま遊びます。先生の役目は、子どもたちから自然に出てくる質問に答えてあげること、子どものそばにいて危険がないか見守ることです。

多様な活動形態

森の幼稚園にはいろんなタイプがあります。1 年中森の中で遊ぶオーソドックスなものから、普段は普通の園舎で子どもたちを遊ばせて、週 1 回など定期的に森の中へと出かけていくタイプ、また午前中は普通の幼稚園に通っている子どもが、週に 1・2 回、午後だけ森に通ってくるタイプなど。普通の幼稚園に通う子どもたちが週に 1・2 回通ってくるタイプです。

五感を使う自然体験の重要性

森のなかでの遊びは危険がつきものです。子どもたちは体をつかって自分の限界を学びます。また、その限界を乗り越えたときの喜びは、自分に対する大きな自信となります。想像力、身体能力、精神と体のバランス、社会性が同時に養われるのです。四季の移り変わりを体で感じることができるのも森の幼稚園の特色でしょう。

森の幼稚園に通った子どもは、普通の幼稚園を出た子どもより発育（特に学習の能力）に遅れが出るのでは、と心配する声もあります。しかし、ダルムシュタット教育大学教授ローランド・ゲオルゲス（Roland Georges）が行った調査によれば、両者で発育レベルに差はほとんどありません。学校に入ってからの成長を見てみると、森の幼稚園出の子どもの方が、学習面、社会行動、身体の能力とさまざまな面で成長がいい、という結果が出ています。森の中で遊ぶことで培われた想像力、集中力、我慢強さ、精神と体のバランス、社会性などが子どもの後々の成長にとって大切であることを、この学術調査は肯定しています。

森の幼稚園は、子どもたちが五感を使って自然を体験すること、そしてそのためのプログラムの柔軟性を重視しています。「五感による自然体験」は、環境教育においてもっとも重要だとされる過程のひとつです。

子どもたちは、物事を理解する前に、まず見たり触ったり五感を使って体験します。そうした中、自然にでてくる興味や疑問が、後々のしっかりとした理解につながるのです。「小さいころに五感を使って学んだことは大人になってからも忘れない」。フライブルクのエコステーションをはじめとする多くの環境教育の施設、団体が教育理念として掲げています。